

---

令和5年度 不登校対策プロジェクト事業

# 年間事業報告書

---

不登校の未然防止や対応・支援に係る効果的な取組について、指定校の実践をまとめたものです。

## <事業実施校>

上越市立板倉小学校

上越市立城西中学校

弥彦村立弥彦小学校

十日町市立田沢小学校

十日町立中里中学校

加茂市立加茂中学校

関川村立関川小学校

村上市立村上東中学校

新潟県教育庁生徒指導課

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

3つの学校が統合して3年目を迎え、学校の合言葉である「自分もみんなも大切に」が児童・教職員の間にも定着してきたように感じます。この合言葉がより実生活の中で活きていることを児童・教職員が、共に実感できるような場面を設定しようと3つの取組に力を入れてきました。

- ① 各学年における年間指導計画に基づいた部落問題学習、人権教育の確実な授業実践
- ② 人とのかかわり方や自分自身を振り返るための異学年交流活動の実施
- ③ 教職員の学びを深めるための生徒指導上の諸問題をテーマとした研修会の実施

児童・教職員を対象とした学校アンケートの中に「お互いのよさや違いを認め、いじめや仲間外しをなくそうと行動している」という質問項目がありますが、児童・教職員それぞれから8割以上の肯定的な評価を得られました。いじめや差別を許さない、見逃さない児童やお互いのよさや違いを認め合える児童の育成を目指すことが、不登校問題への未然防止につながると考えます。そして、私たち教職員が児童とのかかわり方を学び直すことで、不登校問題をはじめとした生徒指導上の諸問題への対応・個に即した適切な支援に結びついていくことを共通認識することができました。

## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1) 未然防止

#### ① お互いのよさや違いを認め合う人権教育、同和教育の推進と「こころ」の学習の充実

当校では、部落問題学習、人権教育の学習を「こころ」の学習と位置づけ、児童の発達段階に応じた学習を積み重ねています。学習を通じて、いじめや差別へ憤りの気持ちを高めるとともに、悲しくつらい立場の人の気持ちに寄り添うことで人権問題に対して自分事として向き合う児童の姿を育てています。「いじめや差別をしない。見つけたら自分から注意したい。」「自分も気付かないうちに相手を傷つけていたかもしれない。相手の気持ちを考えて行動したい。」等の児童の振り返りを聞くことができました。この学びの積み重ねにより、実生活でも他者を思いやり、弱い立場の人の気持ちに共感し、寄り添う児童の姿が見られるようになりました。



#### ② 誰とでも仲よくできる子を目指したスマイルファミリー班活動の実施

スマイルファミリー班活動（異学年交流活動）を通して、スマイル遠足やスマイル祭りを計画し、異学年間での交流を深める活動を設定しました。普段の生活の中では、かかわる機会が少なくても、同じ目的に向かって協力する中で、仲よく楽しく活動を進めることができました。活動後にはお互いのよいところをメッセージカード



に書いて交換し、スマイル遠足では「荷物を持ってくれてありがとう」「優しく声をかけてくれてありがとう」等、スマイル祭りでは「手伝ってくれてありがとう」「みんなをまとめてくれてありがとう」等、感謝の気持ちがあたたかい言葉で飛び交う場となりました。活動を通して見つけた相手のよいところを伝え合うことで、メッセージを書いた児童も受け取った児童もあたたかい気持ちになり、自然と笑顔になる場面が多く見られました。

## (2) 対応・支援

### ①上越教育大学と連携したアンケートの実施・分析と生徒指導研修会

児童を対象としたアンケートを実施し、分析結果をもとにQUの結果と照らし合わせることで、児童の実態をより正確に把握することができました。個別に対応が必要な児童や気になる児童の今後の方策についても職員間での共通認識を図り、複数の職員で声をかけたり、支援したりする体制の充実を図ることができました。

また、上越教育大学大学院 准教授 蜂須賀洋一様を講師として招き、生徒指導問題に対する職員の対応についてお話しいただきました。私たちが初めて知る情報も多く、判例等を通して理解を深めることができました。また具体的な事例に基づき、自分ならどうするかを教職員同士で議論する中で、多くの学びにつながりました。問題が発生したときは、すぐに管理職に相談することや、一人ではなく複数の教職員で対応することの大切さを改めて職員全体で共有する機会にもなりました。



### ②専門的な知識のある外部講師を招聘した研修会

静岡県のフリースクール元気学園から校長 小林高子様を講師として招き、「不登校の子どもたちの問題とお母さんへの対応に苦しむ学校」と題して講演をいただきました。不登校になる児童の背景やその要因について詳しく教えていただき、さらには不登校傾向を示す児童についても個別に相談にのっていただきました。不登校になる要因として学習に対する困難が多いとのお話から、学習に困難さを感じる児童に対し、少人数学習や取り出し指導等の具体的な対応を行ったことで、児童からは「学習が分かるようになった」「勉強が面白い」との声が聞かれるようになりました。



## 3 今後の課題

今年度、不登校対策プロジェクト事業を活用することで、児童一人一人が学校を楽しんでいる場面はいつなのか、その子が抱える困り感やしんどさは何なのかを考え、日々の児童とのかかわりを教職員が見つめ直す機会となりました。さらに定期的実施する生活アンケートや教育相談の結果から、児童の小さなつぶやきを拾い、個に応じた対応策や支援策を学校全体で考えていくことの大切さを実感することもできました。

一方で、年間30日以上欠席している児童がいることや、不登校予備軍になりうる児童がいることも見過ごすことができない状況になっています。それぞれの児童においては、学習への不安や家庭環境、友達関係等が複雑に絡み合っていることが背景となっているため、担当職員だけでなく学校全体の問題として組織的な対応を進めていくことや、関係機関との連携を進めていくことが今後必要であると感じました。

今回の不登校対策プロジェクト事業を通して、教職員自身の学びを深めることができたと同時に、専門的な知識をもつ方とのつながりをもつことができたことに大きな価値があると実感しました。学校内だけで対処するには難しいケースもあるため、学校外の専門機関との連携・協力を図りつつ、児童一人一人の想いに寄り添う教職員集団を目指していきます。

1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

(1)未然防止にかかわって

【目指す姿】「お互いに尊重しながら、協働できる仲間づくり」に向けて

全校生徒・保護者に配布

中 上越市立城西中学校

すべての生徒に、安心して学校生活を送ってもらうための取組

多様な学びの場を設けます

○オンラインによる学習  
→リモートによる授業参加、教材の送受信などを、ご自宅のWi-Fi環境やご希望に応じて行います。

○校内教育支援センター(にじいろ教室)での学習  
→様々な理由で自教室での学習や集団行動に不安や困難を感じている場合、ご希望に応じて、個別に支援します。

★にじいろ教室1  
保健室の隣の談話室で、次のステップ(集団での学習、進学など)に向けて、時間割に沿って学習します。オンラインで自教室の授業にも参加できます。

★にじいろ教室2  
北校舎1階の会議室で、自分のペースで学習を進めます。学習の方法や内容は、ご家族やスタッフと相談しながら、自分で決めます。

☆地域住民や保護者、上越教育大学の大学院生からボランティアでご協力いただき、学習支援や、豊かな体験活動をさせていただいています。

○校外の多様な学びの場の紹介

→校外にも、市や民間が運営している様々な学びの場があります。登校と同じ扱いにできる所も多くあります。ご希望に応じて、紹介いたします。

学校を「共生社会を学ぶ場」にしていきたいと思います

○生徒の、学校活動への主体的参画  
→生徒会が「よりよい学校づくり」のために年間を通して行っている「アンケート」を基にした「城西アピール活動」は、新潟県が全国に先駆けて2000年度に作成した「いじめ防止学習プログラム」(PEACEメソッド)に基づいた活動で、城西中の財産と言ってもよい、生徒主体の活動です。  
→生徒会行事なども、生徒自身が「共生」の理念に基づき、主体的に参画できるよう配慮しています。

○「学校のアメニティ向上委員会」  
→特設で、生徒と職員によるこの委員会を設置し、校則や制服の見直しを含めた、学校のアメニティ向上に取り組んでいます。

★校内教育相談部会、校内支援委員会、随時の相談会、専門家との連携  
各学年の教育相談担当教員、養護教諭、管理職、スクールカウンセラー等が参加して、困り感をもつ生徒や相談を受けている生徒への支援策を協議しています。この会議を受け、生徒や保護者との相談会の実施や、校外の専門家からの指導助言を受ける会などを行います。上記の他にも、様々な機関の専門家と連携して、チーム支援を行っています。

当校のグランドデザインの柱

「共生社会」の礎を  
生徒と教師が共に創っていく学校



寄り添う

生徒一人一人の教育的課題や  
思いに寄り添う支援の充実

○チーム担任制

→複数の教員が担任を務めることで、生徒の多面的理解を推進し、チーム支援に努めます。

心のSOSを見逃さず  
「チーム学校」で支援します

○多様なアンケートの実施  
→生徒が「いつでも悩みを聞いてもらえる」という安心感をもって学校生活を送れるよう、また、生徒のSOSを少しでも早く受け止められるよう、様々なアンケートを行っています。アンケートには即日、複数職員で確認し、対応や相談につなげています。

★教育相談前のアンケート  
定期教育相談の前に、悩み事などを書いてもらうものです。(年3回)

★仲間とのかわりに関するアンケート(年2回)

★いじめアンケート  
上越市のいじめ防止基本方針に基づき、匿名で行います。(年1回)

★体罰や不適切指導に関するアンケート  
新潟県により、全県の学校で毎年行われます。当校独自でも実施しています。ハラスメントの相談電話も設置しています。

★「城西タイム」における「週の振り返り」  
当校が独自に行っているもので、その時期に即した振り返りや、困っていることや不安、悩み、心配などについて書いてもらうものです。(毎週)

○多様な相談窓口の設置、専門家との連携

→一校内外の、様々な専門性をもつ者が相談やチーム支援を行えるよう努めています。いつでもご相談ください。

★心理の専門家  
スクールカウンセラーが、ご希望に応じて、生徒や保護者の皆さんのカウンセリングを行います。

★健康や食の専門家  
養護教諭や栄養教諭が皆さんの相談を受け、助言したり専門家を紹介したりします。

★福祉や家庭支援の専門家  
市教育委員会や県配置のスクールソーシャルワーカーが相談を受け、助言したり、支援してくれる機関を紹介したりします。

★発達や障がいの専門家  
養護教諭や特別支援教育担当教諭が相談を受け、助言したり専門家を紹介したりします。

★災害や事件、事故に遭遇した際の緊急支援  
校外の専門家の緊急派遣などにより、心のケアをはじめとする緊急支援にあたります。大変な状況の時には遠慮なくご相談ください。

上の図にある3つの柱 ○多様な学びの場を設けます

○心のSOSを見逃さず「チーム学校」で支援します

○学校を「共生社会を学ぶ場」にしていきたいと思います

を中心に、生徒と教師が意見を出し合いながら「すべての生徒に、安心して学校生活を送ってもらうための取組」を行っています。

① 生徒会アンケートと、その結果分析や取組を生徒と職員で行う「城西アピール活動」(「いじめ防止学習プログラム」(新潟県教育委員会、2000年))が提唱するPEACEメソッドを基にした活動)に、年間を通して全校で取り組んでいます。

② 様々な理由で登校しにくい状況にある生徒も、得意なことや興味のあることを生かして生徒会活動に参加できるよう、新たな委員会「城西向上委員会」が発足しました。

- ③ 生徒と職員、コミュニティスクール（以下「CS」と略記）委員で構成される「学校のアメニティ向上委員会」において、校則の再検討（「ルールからマナーへ」）や、制服の変更などをはじめとする学校のアメニティ向上についての検討や発信を進めています。

上のような取組を進める中で、登校日数や、学校で過ごせる時間が増える生徒、自分なりの学び方を見つけて取り組める生徒が増えています。

## (2) 対応・支援にかかわって

### 【目指す姿】「学習保障及び評価の充実」「一人一人の成長」に向けて

「学びにアクセスできない生徒をゼロにする」ことを目指して、生徒一人一人を大切にしたい指導や評価の方法を検討してきました。各教科で、一人一人に応じた課題の設定や、多様な評価方法を考えました。その結果、登校できない日が多い生徒にも、指導や評価ができるようになり、通知表などで、評定値をつけることができない生徒の数も大きく減りました。

## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1)未然防止にかかわって

- ①チーム担任制にすることで、生徒を多面的に理解することや、それぞれの職員が、得意な部分を活かして、生徒をチームで支援することが促進されました。困った時に相談できる職員が増えたことについて、生徒や保護者から肯定的な評価をいただいています。
- ②毎週水曜日の終学活を10分延長し、「城西タイム」（生徒に、その時期に即した振り返りや、困っていることや不安、悩み、心配などを記述してもらう時間）を設けています。心のSOSの早期認知や、即時の相談や対応につながっています。他にも、多様なアンケート（全ページの図参照）を計画的に実施して、生徒の理解やチーム支援につなげています。

### (2)対応・支援にかかわって

- ①多様な学びの場を設ける（前ページの図参照）ことで、登校できる生徒や、自分なりの学習法で学力を向上させる生徒が増えました。特に、校内教育支援センター（当校では「にじいろ教室」と呼んでいます）を、生徒の状況や目標によって以下のように2つに分けたことは、登校できる生徒の増加や学力保障に、効果を上げました。

【にじいろ1】…次のステップ（受検や集団での学習など）に向けて、時間割に沿って学習。

【にじいろ2】…学習の時間、方法、内容は、スタッフと相談しながら自分で決めて取り組む。

校外の教育機関と連携しての学習支援も進めています。

- ②ボランティア（上越教育大学の大学院生や、地域住民）の皆さんから、学習面やメンタル面での支援をいただいています。

写真は、ボランティアのCS委員と行っているフラワーアレンジメントの作品です。他にも、地域の方や大学院生、職員が、ヨガ、ジャグリング、マジックショー、陶芸など、様々な楽しい体験を提供しています。

- ③校外の専門機関（心理、健康、食、福祉、家庭支援、発達や障がいなどの専門家）との連携・協力により「チーム支援」の充実を図っています。



## 3 今後の課題

- (1) チーム担任制を、体制や、職員の意識の面から、よりレベルアップさせていきます。
- (2) 校区内小学校との連携や情報の共有を推進し、義務教育9ヶ年を見通した指導・支援の充実を図っていきます。

# 令和5年度 不登校対策プロジェクト事業 年間事業報告書

弥彦村立弥彦小学校

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

教職員の異動サイクルが短く、3年ごとに半数の職員が入れ替わる状況であり、初任3校目までの経験年数の少ない教員が多い。そのため、不登校対応への経験に乏しい職員が多い。そこで学校組織として以下のような不登校未然防止の枠組を作り、職員の異動があっても継続的に対応できる組織体制の構築を目指す姿として取り組んだ。

①WEBQUの分析研修に基づいた学級経営案の作成による経験年数にとらわれない学級づくり

②専科教員制の導入による複数教員による児童支援

③全校一斉方式ソーシャルスキル教育の実施による学級間の意識の差の是正

④いじめ等問題行動初期対応チェックシートの活用による迅速かつ丁寧な対応

⑤年間アンケート、教育相談の計画的な実施による効果的な実態把握と対応

⑥学級づくりスタンダード、授業づくりスタンダードの実施による学級間格差の是正

⑦年間カリキュラム表への温かい学級づくりを入れ込み、担任に左右されない学級づくりの実施

上記の取組の結果、どの学級においても、ある一定のレベルで学級づくり、児童対応が出来るようになった。また、専科教員制の導入や職員の協働による学級づくりを進めた結果、教職員全員で児童を育てていくという意識の醸成や他学年、他学級の児童に対する職員間の情報共有が高まった。そのため、職員間の児童理解が深まり、結果として不登校を未然に防ぐことができた。

## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1) 未然防止

#### ①エビデンスに基づく学級づくり



組織として継続的な取組を行うためには、従来の教師の勤や経験によらない、エビデンスに基づく学級づくりが重要である。そこで、当校では学級集団をアセスメントするQ-Uのデジタル版であるWEBQUを導入し、調査から結果までのタイムラグを無くし、調査結果に基づく「温かい学級づくり」の職員研修を実施し、WEBQUに基づく具体的な個別支援と集団育成に取り組んだ。その結果、チームとして「親和的な学級

集団」を作るという学級経営の向かうべき先が明確となった。

#### ②専科教員制導入による組織対応

学年内で専科教員制を導入したことにより、複数の教員が授業をとおして児童を見ることができた。その結果、学年の協働性が高まり、児童の些細な変化に気づき、学年として早期に対応できるようになった。

#### ③全校一斉方式ソーシャルスキル教育の実施

当校の児童に必要とされる人間関係の調整能力に関わるソーシャルスキルを教員が劇形式で

全校児童の前で行い、モデリングをしたのち、各クラスでもう一度行い、振り返りを行う活動を年間を通じて行った。そのことにより、学級間での指導の差が無くなり、学校として身に付けさせたいソーシャルスキルを計画的に育てることができた。

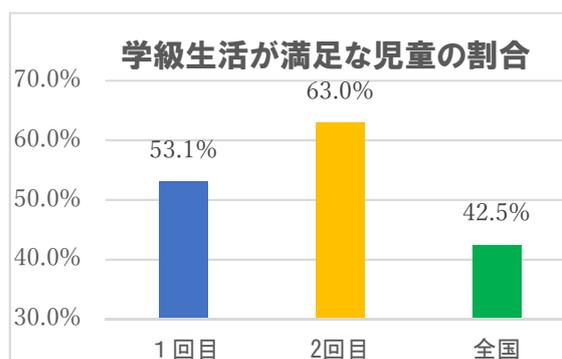
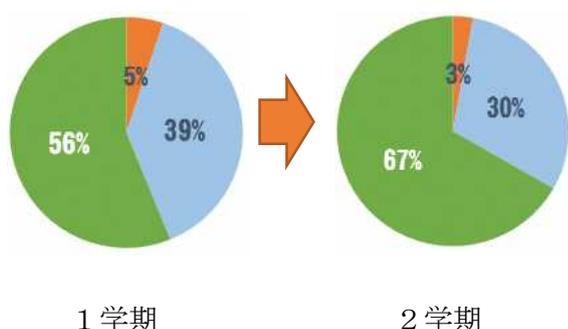
## (2) 対応・支援

学校不適応感(いじめ・冷やかしを感じる)の有無の児童の割合 (WEBQU) は、感じていない・あまり感じていないと思っている児童の割合が1学期は、95%、2学期末は、97%だった。(下円グラフ)

また、学級生活に満足している児童の割合は、1学期は、53%、2学期末は、63%に増加した。(下棒グラフ) 全国平均は 42.5%なので、学級生活に満足している児童の割合は多いと判断している。

最後に、不登校児童の全児童における出現率であるが、令和4年度は、1.6%、令和5年度は1.1%であり、今年度の取組の成果が数字として表れている。

【学校不適応感の有無】



### ○専科教員制に対する全校児童のアンケート結果

	肯定的評価
隣のクラスの先生の授業が楽しかった。	93.6%
隣のクラスの先生の授業がよく分かった。	97.8%
学年の先生が入れ替わる授業システムはよかった。	92.9%

### ○専科教員制に対する児童の感想

- ・担任の先生だけでなく、隣のクラスの先生の授業ができてよかった。
- ・いろいろな先生と親しくなるからよかった。
- ・いろいろな先生との関わりが増えた。
- ・中学校に行ったら教科によって先生が替わるから、慣れることができていると思う。

## 3 今後の課題

- ・アンケート、WEBQU、日頃の見取りを生かし、不登校傾向にある児童の早期発見、早期対応ができるスクリーニングシステムを作る。
- ・温かい学級づくりや全校一斉方式ソーシャルスキル教育のカリキュラム表への位置付けによる教職員の異動に影響されない継続的な教育ができるシステムの定着を図る。

# 令和5年 不登校対策プロジェクト事業 年間事業報告書

十日町市立田沢小学校

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

### <未然防止について>

生活アンケートとその後の個別の面談時間を確保して取り組み、悩みのある児童の話や困っている友達の情報を知ることができた。アンケートを有効に活用し未然防止に役立てることができた。友達との関わり方についてのソーシャルスキルトレーニングや温かいメッセージを伝えるカードのやり取りなどで、友達と協力して活動することが好きな児童が増えた（6学年中4学年の学級でアンケート結果の向上が見られた）。

### <対応・支援について>

遅れて登校する児童や、なかなか学校に入れない児童に対しては全職員で共通理解を図ることで、児童が登校したときは即時対応することができた。担任だけでなくどの職員でも温かく迎える対応をすることができるようになった。

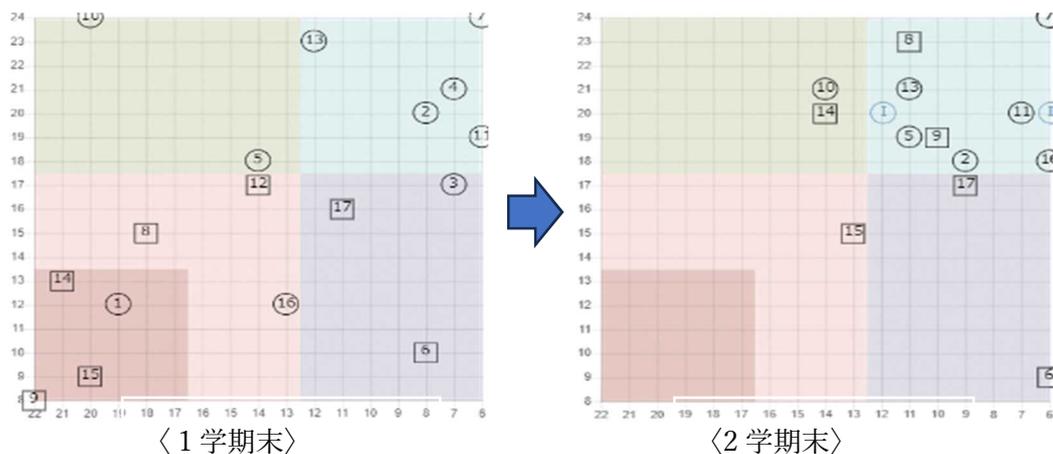
## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1) 未然防止

#### ①WEBQU の活用とアドバイザーによる指導

「よりよい人間関係の形成を目指す集団作り」をテーマに取り組んだ。未然防止と学級の現状を職員全員で共通理解するために、WEBQU 後に事例検討会を行い、学級シートを活用しながら話し合った。後日、アドバイザーから WEBQU の結果を基に、これからの学級作りについてご指導いただき、2学期以降の学級作りに生かした。

3学期スタート時にもアドバイザーに来ていただき、2回目の結果を基に今までの成果と課題、学級仕舞いに向けた方策などの話をしていただいた。アドバイスから2学期以降の学級経営に生かし、2回目の WEBQU で多くの児童が満足群に向かうようになった学年が3学年あった（下図は大きな変化の見られた学級の結果）。



## ② ソーシャルスキルトレーニングの全校実施

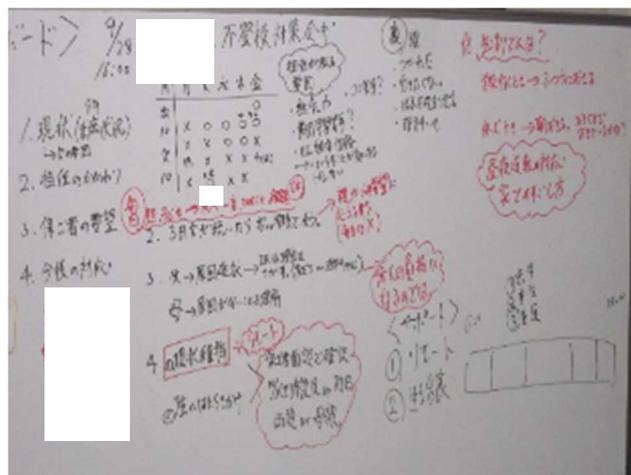
SST(ソーシャルスキルトレーニング)集会を全校で実施した。学校全体でソーシャルスキルの向上を目指し、より良い人間関係を築けることをねらいとして取り組んだ。職員がモデリングを示し、すぐに学級で児童がリハーサルをするという計画で実施した。

どの学年も今まで取り組んだことのない内容に興味をもつとともに、温かい言葉や対応を経験することで「友達と温かく関わるうれしさ」を感じ取っていた。授業中も学んだことを生かした友達との接し方が見られるようになった。また、SST 実践後すぐに変化が見られた児童もいたので、これからも継続して取り組んでいきたい。

## (2) 対応・支援

不登校対策を組織として運営し、学級担任と話し合いをしながらケース会議を行った。ホワイトボードを活用し(右写真)、現状の課題、児童や保護者の願いなどを考慮しながら、その後の支援の仕方について話し合った。必要に応じてスクールカウンセラーの意見も聞きながら進めた。

成果として、長期不登校の児童は現在の時点でおらず、児童のその日の気持ちやモチベーションに寄り添うことで遅く登校したり、短い時間だけ学校に来たりするなどできるようになった。



## 3 今後の課題

当校には毎日遅れてくる児童や、行事等に参加できない児童、友達関係がうまくいかない児童など様々な理由により欠席する児童が在籍する。今年度、長期不登校児童がいなかったのは職員間の連携の成果だと考える。今年度は加配教員(高学年専科特別配置事業)が1名いたため、職員一人一人に時間的なゆとりが生まれ、不応児童の対応に当たることができた。年度が変わって職員減になった際に、学校組織として多様なニーズに対応していくことが難しくなることが課題である。

年度の変わり目は児童にとっても環境の変化が大きい。学校から足が遠のくことのないように、引き継ぎを丁寧に行い、児童が次の学年でもよいスタートを切れるようにしていくことが今後の課題となる。

# 令和5年度 不登校対策プロジェクト事業 年間事業報告書

十日町市立中里中学校

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

- 生活アンケートやQ Uを実施し分析結果の報告を受け、生徒の実態がより明確になり、目指す生徒像に近づけるための活動の計画がスムーズにできた。
- 全校生徒でコミュニケーション活動を3回実施し、毎回相手を変えながらペアトークを行った。回を重ねるごとに、話すことが苦手な生徒も相手からの質問に答えることができるようになった。仲間づくりの経験値が高まったと考える。
- ランダムに異学年でグループを作り交流活動を実施した。これまでかかわりが薄かった生徒同士やどちらかという苦手としている生徒同士がかかわりあうという経験をした。その経験の振り返りの中で、相手の良さを認め合う発言もあり、周りの人への見方に変化が見られた。
- 全校生徒と一緒に活動する授業を設定した。経験がないことに対して否定的な気持ちがあり授業や活動に参加しない生徒も、活動後には肯定的な考えに変化する姿が見られ、通常の日常活動に対してこれまでより前向きに取り組もうとする姿が見られるようになった。
- コミュニケーション活動に全校生徒職員も参加し、実践的な職員研修になった。

## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1) 未然防止

#### ①ソーシャルスキルやコミュニケーションの取り方について学ぶためのコミュニケーション活動を3回実施（講師：中林左知男様）

- ・1回目2回目は講師を依頼し、職員研修を兼ねた。3回目は職員が行った。活動はアイスブレイクに始まり、プロジェクト・アドベンチャー、ペアトークを組み合わせて行った。始めは緊張していた生徒も、活動が進むにつれ笑顔が見られるようになり、最後のひらめき活動には、学年を超えて意見を出し合い問題を解いていく姿が見られた。始めは、他のチームに負けないようにという思いで活動していた様子だったが、活動が終わるごとに『グループ内でどのようにかかわったのか』という振り返りをするようになり、悔しい気持ちをもちながらも生徒たちの表情は明るく達成感に満ちていた。
- ・活動後の振り返りには、「これまで話したことがない人と話せて良かった」「初めてグループになった人と協力してやることができ良かった。」とあり、参加者全員が活動に対して高評価であったことが分かった。グループ活動が苦手な生徒も「楽しかった」「協力できて良かった」と記していた。



#### ②全校道徳授業の実施（講師：上越教育大学いじめ・生徒指導研究センター長 高橋知己様）

- ・生活アンケートの実施の報告から、より生徒の実態が明確になり、過去の経験にとらわれ思いや考えを表現できない姿が見えてきた。特に、いじめやいじりなどで傷つくことを不安に感じている生徒が多く、学級に居心地の悪さを感じている生徒がいることもあり、全校道徳を実施した。『いじめはなぜ起きてしまうのか。その原因はなにか』ということ視点をした授業であった。教室や学校に居心地の悪さを感じ欠席する生徒や不登校になっている生徒がいる中で、今回の授業の視点は、生徒にも職員にとっても新たな視点で、環境

を見直すきっかけになった。

- ・生徒は振り返りで、「いじめは加害者が隠しているとわかるのが遅くなる。いじめられている人が相談しないといけない（1年）」「班での話し合いのときに自分の意見が正直に言えた。これからの勇気を出して発言したい。（1年）」「いじめやいじりをつくるのは自分次第だと思った（2年）」「いじめは人によって嫌だと思えることが違うから難しい問題だと思った。人が嫌だと思えることをやっではいけないという意識を大事にしたい（2年）」「いじめられたときは人に相談することが大切だと思った（2年）」「いじめたりいじめられたりしたときは隠さずに話したいと思った（3年）」「いじめが見つかりにくい原因について考えることができた。早期発見を心がけるために、恐れずに注意したり相談したりするよいのだと思った。（3年）」と自分の思いを素直に書くことができた。
- ・多くの生徒は、普段の活動では発言をためらう。しかし、グループの話し合いで自分の考えを話せたことや誰かに話すことは悪いことではないということに気づき、日常生活の話し合い活動でも自分の考えを言うことができたり、自分の気持ちを相談できたりする生徒が増えている。



## (2) 対応・支援

### ①欠席者への電話連絡および家庭訪問

- ・継続して欠席している生徒には週2～3回の電話連絡と週1回の家庭訪問を実施し、本人や保護者と家庭での過ごし方等について話をしている。その際、学校の予定等を事前に伝え、参加方法等の相談も行ってきた。その結果、学校行事や学級の活動に参加できる生徒が増え、今年度はこれまで全欠の生徒が一人もいない。

### ②相談機関との連携

- ・スクールカウンセラーとの面談を、継続している生徒や保護者がいる。また、学年部職員との支援会議を継続的に行っている生徒や保護者がいる。保護者との面談では、学校職員も入り支援について検討する会議も継続している。家庭と学校が本人の気持ちや課題について共有し、対応することができた。
- ・人数は少ないが市の適応指導教室、校内適応指導教室を利用している生徒は学校への登校が継続できている。また、これまで集団での活動を欠席することが多くあった生徒が、市の相談員との面談を毎週継続している中で、以前より前向きに参加することができるようになった。
- ・スクールソーシャルワーカーとの連携により、他の関係機関とのつながりをもちながら支援を行うことができるようになった。

## 3 今後の課題

生徒・職員とともに活動を通じて新たな視点をもつ機会となり、その後の活動に活かすことができ取組は有効であった。しかし、不登校の状況が改善したとはまだまだ言えない。1小学校から中学校に入学してくることもあり、生徒は自分たちの人間関係に先入観をもっている。また、全員が本校に入学するわけではないことから、小学校で築いてきた人間関係も変わる。今後の課題としては、このような実態を踏まえて、今年度の活動を経験した生徒を中心にして、かかわる力を育てていく必要がある。そのためにも職員が生徒一人一人に向き合い、その声を聞き、生徒の小さな変容にも気づく支援体制を整えていくことがあげられる。併せて目標をもって努力を続ける生徒を支える保護者とも連携が必要である。学校の活動の理解と協力を求める体制の見直しを図ることも必要である。

1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

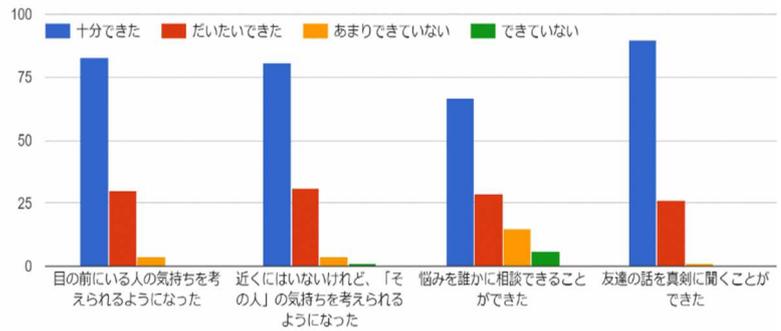
今回の不登校対策における目指す姿として、

- 1 自他ともに学校に不適應を起しそうなときに適切な行動をとれる生徒
- 2 保護者の理解と心の安定
- 3 不登校・不登校傾向の生徒の自立

の三つの柱で取り組んだ。2月初めに、生徒に今回の取組の振り返りのアンケートをとった結果、右の通りであった。

また、「悩みを抱えつつも、明るくたくましく学校生活を送るには、取組で学んだこと以外にどんなことが大切であるか」という質問に対しては、「友達とのより良いコミュニケーション」、「悩みに対する向き合い方」、「自分らしく、強い心で生きる」、「考え方を変えること」、「ストレスに対する行動の仕方」など、様々な気づきが生徒に見られた。

今回の取組では、不登校生徒・不登校傾向生徒の登校を促すきっかけになった。今後次の動きにつながっていくことを期待している。



2 特に成果が見られた取組

(1) 未然防止

① 生き方講演会

講師の人生経験に基づいた「生き方」についての講演会を実施した。講師は孤独になることの苦しさ、友達に寄り添うことの大切さを訴え、強い印象と共に生徒・職員の心に響いた講演会であった。



② ピアサポート集会① (全校一斉)

「どうぶつの森中学校パネルディスカッション～自他を認め、他者を思いやれる集団の育成のために～」生徒アンケートをもとに、不登校傾向の生徒の意見を取り入れ、登校しぶりの仮想中学生によるパネルディスカッションを行った。パネラーの思いや考えを聞き、それぞれの立場で様々な悩みを抱えつつも、学校生活を送っていることに共感を覚えた。スクールカウンセラーが総括として、「悩むことは成長の証」、「SOSを出すことは自分の心を労わることであり、辛いときは誰かに相談してもいい」と伝えた言葉は、体育館に集ったすべての生徒の心に響いた様子が見られた。



③ ピアサポート集会② (学年一斉)「友達の話の聴き方を学ぼう」

全校生徒へのアンケートでの80%近くが、相談できる友達がいるという回答であった。生徒たちは、相談することもあれば、相談されることもあるということに着目し、スキルとして

の「傾聴」を身に付けるために、簡単なロールプレイを行った。その後、前回の全校集会時に共感した「どう森中学生」になりきって、友達に悩みを聞いてもらい、それを傾聴するというトレーニングを行った。

普段何気なく友達の相談を聞いていた生徒だが、この授業を行ったことにより、友達に相談された時、「話してよかった」と思われるような聴き方をしたいという感想を述べていた。

今日授業を受けて、自分は友達に相談するけれど、自分が相談を受けることを考えたことはなかったので、新たな考え方、体験ができました。

2年 女子

人に相談するのは勇気がいることだけれど、その相談を自分してもらえた時には、相談してよかったなと思ってもらえるような態度で聴きたいなと思いました。

3年 女子



## (2) 対応・支援

### ①市の教育支援センターとの連携による支援

月に1回、定期的に市の教育支援センターとの情報交換会を行った。センターに通う生徒を中心に情報交換を行い、共通理解を図った。現在不登校・不登校傾向の生徒についても協議を行い、センターと保護者をつなぐこともできた。またピアサポート集会の内容についても、センターの職員からの専門的な助言を得ることができた。

### ②太鼓講習会の実施

1～3月、月に1回、生徒の放課後活動がない日に不登校生徒とその生徒とつながっている生徒や自己肯定感をもっと高めさせたい生徒に声をかけ、プロの太鼓奏者による講習会を行った。数か月ぶりに登校した生徒もおり、久しぶりの活動に汗をにじませた。集団で音を合わせる楽しさや太鼓をたたくことの爽快感を味わわせることができた。今後も定期的に実施していきたい。



### ③不登校・不登校傾向の生徒の保護者会

保護者がお互いの悩みを打ち明けたり、共通の悩みや課題に気づいたりすることで、保護者同士の心のつながりが生まれることを期待して実施。また、この会が保護者の「心の居場所」として機能するよう、様々なサポートを可能にしていく。各方面の専門家の先生方にも参加していただき、アドバイスを得られることで、保護者が「参加してよかった」という気持ちになるように会を運営する。

## 3 今後の課題

今回の取組が、生徒の日常生活の中で生かされているか検証したり、これらの取組を持続可能にするための「組織的な運営」が課題である。また、地域の人材を活用し、そこからさらにネットワークが広がる工夫とアイデアで、この取組に「明るさ」「楽しさ」が加われば、不登校という問題にもポジティブに向き合えるのではないかと期待する。そのためのネットワークづくりが必要である。

また相談窓口が様々な機関から生徒に紹介されているものの、「自分には関係がない」と思ったり、その時は「必要ではない」と判断したりして、本当に必要な時にどこへ、どうやって相談していいかわからないという生徒が大半であった。今後いろいろな機関の情報を収集し、生徒や保護者が使いやすい「相談マップ」を作ることも必要と思われる。

この度の様々な取組は、すぐに効果が表れるわけではなく、また表れるかどうかかわからない。常に生徒の心や様子を注視し、どんな手立てが必要かを、多くの方々の意見を聞いて進めていくことが大切である。各方面の方と協力し、不登校で悩んでいる生徒やその保護者が、不安がある中でも、明るい希望が持てるような取組を進めていきたい。

# 令和5年度 不登校対策プロジェクト事業 年間事業報告書

関川村立関川小学校

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

昨年度、年に数日しか自学級で過ごせなかったが、今年度は、自学級で過ごす時間が増えた児童が複数いた。中には、週のうち数日を自学級で過ごせるようになった児童もいた。ある児童は朝の登校しぶりが解消され、また、ある児童は、1学期は登校できない日が続いたものの、2学期から不登校が解消された。プロジェクト事業開始時に不登校及び不登校傾向にあった児童の大半で改善が見られた。

## 2 特に成果が見られた取組の具体

### (1) 未然防止

＜生活アンケートの工夫による生徒の実態把握＞

上越教育大学「いじめ・生徒指導研究センター」職員を講師とした職員研修を3回実施した。実際に子どもたちが答えたアンケートの回答を集計・分析する演習をとおして、児童の心理面の変化や、児童が発しているSOSを敏感に察知し、対応していくことの大切さについて学んだ。また、アンケートの自校化を目指して、児童の実態に即したアンケート項目を考えたり、児童の反応を想定して選択肢を考えたりする実践的な演習も受講した。この研修を通して、自分の学校・学級の児童の傾向について、さらに理解が深まった。3回の職員研修を通して、職員の意識や子どもの見方が変わり、未然防止につながったと考える。



上越教育大学大学院 高橋知己教授による講義  
「生活アンケートの集計・分析について」



## (2) 対応・支援

### <校内教育支援センター（ハートルーム）>

関川村の協力を得て令和4年度から新設している校内教育支援センター、通称「ハートルーム」では、不登校や集団不適應等のため教室へ入れない子どもたちが、自分の居場所として過ごしている。常駐する教育相談の職員も配置されていて、2年目の今年度は特に効果が上がっている。ある児童2人は、ルーム内での学習や創作などの活動をとおして交流が深まり、人間関係づくりにも好影響が表れてきた。また、これまで対人関係を避けていたある別の児童は、自教室で給食を食べたり、自分の学級に戻って学習したり等、集団での活動へ参加するようになった。

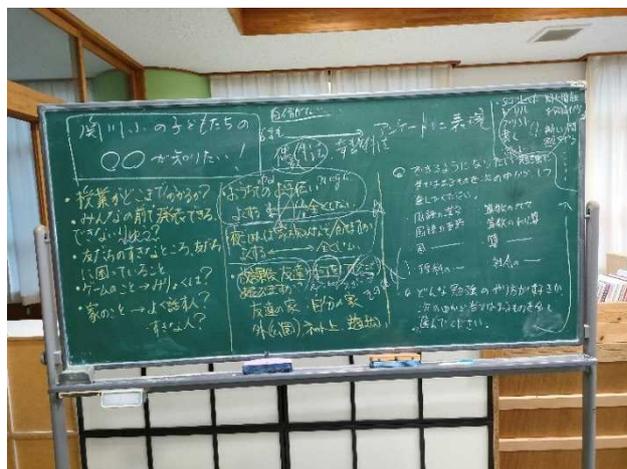
### <子どもとともに1・2・3運動の徹底に係る取組>

関川村子どもとともに1・2・3の実施を徹底した。1日目は、電話やメッセージ等で家庭へ連絡、可能な限り2日目には家庭訪問を実施。家庭訪問実施後は、管理職へ家庭訪問の内容について報告し、指導を受けるようにした。若手の職員は、具体的な指導を受けて、迅速な対応ができるようになってきた。また、この取組を通して、より組織的な動きが可能になった。

## 3 今後の課題

不登校対策プロジェクト事業をとおして、職員の意識や具体的な対応が変容したこと、それにより不登校傾向が改善された児童が多くみられたことは大きな成果である。一方、児童を取り巻く家庭環境、児童自身の対人スキル不足、各家庭における不登校に対する考え方の多様化、学校の教職員数不足による多忙化等、新たな不登校が生じやすい要因が多数存在するのが現状である。この事業を通して得たことを、来年度以降も継続的に実施し、さらなる未然防止に努めることが課題である。

また、「つなぐチャンネル」については、高学年3名に紹介はしたが、いずれも利用する姿が見られなかった。しかしながら、管理職・保護者・担任での面談を複数回もち、保護者の話を丁寧に聞いて、根気強く対応したことで、不登校解消につながった。児童理解に努め、適切で効果的な支援をすることも課題である。



# 令和5年度 不登校対策プロジェクト事業 年間事業報告書

村上市立村上東中学校

## 1 令和5年度における不登校対策に関する自校の成果、目指す姿の達成状況等

今年度、新規に不登校となった生徒は1名だけであり、当校の不登校出現率は5.6%であった。これは以下のような取り組みを進めてきた成果であると考ええる。

全校生徒に対してCAPプログラム（中学生暴力防止プログラム）を行い、子供たちの問題解決力や社会性を高めることにより、新規不登校生徒数を抑えることができたと考ええる。また、新1年生においては、入学後に小学校の教員と中学校の担任で情報交換を行い、生徒理解をさらに深め、新たな対応の仕方や生徒本人の困り感、不安や悩みにアプローチすることができた。

夏季休業中には、教職員対象にグループエンカウターの研修やQ-Uの研修・分析を行い、新学期から新たな不適応生徒を生み出さないよう支援方法の確認、教員のスキルアップを図った。

さらに、校内教育支援センターを運営し、教室に足を向けづらい生徒にとっての居場所とした。教室に戻ることが目標ではなく、生徒にとっての居場所になることを目的とし、教職員の共通理解を図って指導にあたることで、安心して学校生活を送ることができていると感じられる。利用している生徒の中には、総合的な学習の時間や、保健体育の授業に参加する生徒もあらわれた。オンライン授業も行うことで、学習の保障にも努めた。校内教育支援センターを運営することで、保健室を利用する生徒が減り、養護教諭の負担軽減にもつながった。

家庭の教育力が期待できない保護者に対して、ケース会議を開き支援方法の検討を行い、家庭・生徒の心の安定を図ることができた。結果、あらたな問題行動を起こすことが少なくなり、本人や周りの生徒にとって、学級が安心・安全に生活できる場となった。

教職員は、CAPプログラム、教職員ワークショップを受けたり、研修で身に付けたことをもとに、日々、生徒情報の共有、対応についての協議を積み重ねたりするなど、生徒に寄り添った指導・支援を進めた効果が表れたと考えている。

## 2 特に成果が見られた取組の具体的事例

### (1) 未然防止

#### 【CAPプログラム】

CAPにいがたのトレーナーの皆さんには、寸劇、討論などを盛り込んで、暴力防止の具体的対処法を教えていただいた。「～してはいけません」のような危険回避の方法とは異なり、「～することができるよ」と身を守るための行動の選択肢を広げ練習した。安心、自信、自由の人権を生徒たちにくり返し伝えていただいた。教員向けのワークショップでは、生徒に向けて行う授業を行っていただいた。安心安全に学校生活を送るための話を順序立てて説明してもらうことで、大変理解しやすく、行動を振り返ることができた。保護者向けのワークショップも教員向けと同様に、生徒に向けて行う授業を行っていただいた。家ではあまり話さない子供にとって、共感的な姿勢で話を聞くことなど、家庭でできることを中心にお話をいただいた。生徒には、2日間計4時間の授業を行っていただいた。安心安全の環境の下、学校生活を過ごすことの大切さや、自分の人権が奪われるとはどういうことか、人の人権を奪うとはどういうことかを分かりやすく丁寧にトレーニングしていただいた。自分の権利を守ること、他人の権利を守ることを自覚して行動

しようとする姿勢につながったと考える。

○生徒向けの授業 肯定的評価 73%

○教員向けの研修 肯定的評価 100%

	R4 欠席日数	R5 欠席日数
3年男子生徒①	104	82
3年男子生徒②	0	9
2年男子生徒	12	15
2年女子生徒①	95	25
2年女子生徒②	96	14
2年女子生徒③	33	33

## (2) 対応・支援

### 【校内教育支援センター】

校内教育支援センターを整備し、常時2名の生徒が利用していた。生徒の生活リズムに合わせた登下校とし、自分にあったペースで

自分が選択した学習を進めていた。10分休みや昼休みなど仲の良い友達が来校し会話を楽しんだり、折り紙を使った遊びをしたりと、心の安定を図った。その結果、3学期には、体育や総合などの授業に参加できるようになった生徒もいる。オンライン授業を開設し、学習を進めたことで、校内の定期テストを受けることができた。

### 【上越教育大学との連携】

アンケート結果から各学級の様子を分析していただいたことで、各学年部で今後の指導の方法や対応策を考え、実践することができた。

### 【心のノートの活用】

週1回生活ノートを利用した生徒とのやり取りは大変効果があった。ノートに書かれた内容から生徒の悩みや困り感をとらえ、関係職員で生徒間のトラブルの防止・解決を図ることができた。担任との信頼関係を築く上でも有効だった。

### 【市の教育支援センター】

学校に足が向かない生徒に対しては、市内教育支援センター指導員とも情報を共有して協働で対応した。施設の見学から始め、現在は週1回、通室することができるようになった生徒がいる。

## 3 今後の課題

### 【校内教育支援センターのさらなる整備】

生徒が個人で学習するスペース、共同で学習するスペースなどに配慮した教室環境を整備する。また、オンライン環境はあるので、自教室の授業に参加できるようヘッドホンを用意する。学年職員が担当するのではなく、一つの教室として授業担当者を時間割の中に組み込み、様々な教員と関われるようにする。

### 【市の教育支援センター】

情報を提供し、必要に応じて見学や通室を促していく。

### 【CAPプログラム】

今年度は1～3年まで全学年行ったので、来年度は1年のみ行い、以降CAPのプログラムを新1年生が毎年受けるようにする。そのための予算を捻出する。(予算面は難しい課題である)

### 【心のノート】

継続の方向で考えている。教材費で予算を立て用意をする。

### 【教職員の研修】

教職員の生徒と相談する力量を高めることを含めた研修を進めていく必要がある。